源氏大繩

部類　物語
函號　三架　二二五
書名　源氏大繩
冊數　二

渡邊孚千秋清覽

一 第十七巻　玉鬘世にそなへ多くの御
なりの名ゆ年月をふれども多くの北
事どもすれ給へる六条院を作り女御
たちと寵のふかつけてもいとよく多くの
まし所さと思ひ出しの御さまの
多くの乳母右近よりこしとせ給ふとて
不知出されて共清てよ○山賤の垣ゐる
とも彩くはあれどうけよ桜子の宮とゆる

帝國文庫
渡邊千秋藏

きられし其姫君といふとひのもとにかくれ
乳母の男とつれて大宰のお貳とこゝにすむ
それより筑紫(カウ)へ今年廿七年なのちとゝ武乳母
此母とこゝに住居の成敗するこの人の撿(ケミ)使の
事ものさたかとこの君をつれ申てゆつま
うしつたてそやこの君七人あれかたらうつて
能もすしこゝにこのめのといふものとられ
とゝ侍る此めのとれおとこ死くめれとい侍家これ
姫君を養育やう度よ肥後の國ゝ守護と変
の將監とゝすのあり古の別腰のこと姫君と

きて及ひ此めのとの入聟よりこと侍るとい侍るとせ
ともあり川せたいせんを抑(仰)てむこ入をこゝ死とそ
右門をゝこゝとあらひさてをいるゝ松て叶
こゝとれかしめしいさき上洛せんとこゝ
此めのとれこゝとたのこて早祝をりつてこの
ひて上洛させよあひう海て心ゝ丁なと
れをこゝと松へ松ゝとけこゝ姫君のこの
あれこゝ松ゝをこゝてきこゝせやこ ○君ゝとこ心
負ゝて松浦なるゝくこのこゝとゝけてちゝん
めのとゝ侍こひこゝ ○そこゝ海ゝ

行方のたゝひるハかてこのうこをはしとせんと
をやおもふ〳〵のわ部をとゝ人すゝ乳母
○うれ酒とこきそ有ものしてもゆくゝ心をくと
海ゝとゝ〳〵ゝ〳〵をつき　海酒とハはゝ〳〵しのまこ
ゝ　姫君　○行方ゝ人ゝ〳〵なこしよ行
てして風よりゝ〳〵ゝ見こそうれ　早松
ふゝをゝりまてつきのつよ又　変物盗ゝ
まてゝ海の初きの新四まて　逃掛ゝ岩
賊　ゝ人ゝ行ゝ姫君とゝ中さしあ
の遠ゝ　ゝ人ゝ　もゝこれを海ゝ

ゝしこ姫君○うれこゝとゝものこさゝく初こ
ふゝ初ゝのゝ　されもゝ
きぬけゝまゝれ初ゝ日ゝ行ゝ
ふきぬゝゝこふて世ゝ見ゝ
京ゝの行ゝ九条ゝ風ふをとゝ長ゝ
をの行ゝ父の行ゝ　神　四ゝ
いのゝけゝゝとゝ初ゝ泰ゝ
松ゝの行ゝとゝ　ゝ
もゝゝ行ゝとゝ　ゝ
のゝゝさんと思ひさんゝゝゝ

右をゝ左使のかれと姫君のめしつかひのあるを
のそせそそそそとあるとて残りたる人々
源氏右近よりはじめ　しとつるされてきてよろし
ていと紀姫君へ奉るたんのれて流を
○二ととの枝乃を残る流れの二を
こまゝゝや　初瀬の二ての枝とそこのとあるを
川のくとゝ初瀬のあるを流れ川のそこに枝
あるを無ものゝ系て初瀬の彩色と云歌
よて清岸和尚　○あしたゝ見れそつせの
ちゝ山ゆきやこれ二流の二てのとのすき

あひこすかなとゝのあるの事の流れ流の心をすれ
させをてとゝ心こ右近ゝ奇の上ゝ姫云
○初瀬川をくのことゝ
さくなられぬ　さゝ右近よりこひて此歌の系
ゝ云とゝ姫君の御為いと紀上源ことそもち
つれくの写と七系色と源とされてなきを
乃年ゝ流也○とゝふゝ乃　のゝ流こひて姫
ゝ人ゝゝよゝ紀ゝいゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝとゝひゝ
て右近中ゝゝ　無乃ゝ乃ゝゝ歌ゝ流ゝ
奇をゝゝくあそゝゝゝとゝゝゝゝゝとて乃ゝ

奇とつかひし給ふ　○そこにもてはやすこと
こと沒法なる事なるべんの筋なるべし
姫君和中納言中將殿　姫君　○かたるべ
色艶く優優中間れ出て
こゝろやすのすちなれば　かくゆゑ
むらさき　　　　　　　　　　
よひ事中せとて出遣とまいりもの
世ゝ　　　　　　　　　　　　
田舍よりの物のあひさつ　　　
行ゝ世のことゝ　　　　　　

より志れる右近ふこしうゝ　　
なりとの給ふさて紅梅の　　
まゝ仕立ゝ遣はらいしのふやゝ六条院へ
来給ふ紫のと○　　
いかゝ　　　　　　　　　　
女房をゝ　　　　　　　　　
ゆつよ世の名　　　　　　　
海よ大内　　　　　　　　　
孔よ玉ゝ　　　　　　　　　
殿と作れ　　　　　　　　　

よの事に輝き琴とされし人の帝と申しなしと云て
よ代とり同なとし給ふれよまのつゝに窓に
おぼしめしき侍ことの秋やあらいひて承くなき
つきる事と思ひ置て此姫君をつくしてきまへに
れてよ公卿にも御心をとゝけゝて中まへん
御方共尼は嫋かく心とゝけまて侍る時の此
る事数限の内に玉のつゝの御まへ承へ共尼に
と返合すとし給ふ此時玉のうへのうつくしき
様人せんとて数々の盃入なくてあはる以
なかけふかくやかく玉鬘のかつくしに

行つとく人せぬつまとこれより　薫乃共尼にしやこ
示くのふとくあるもしりとも縁からすくてつい
前々とい思ひあひ給ひ給ふ記け思の大将心
とりけるを紫の上の御斗として此大将乃
御用よなし給ふなり

一此事に衣くはりと云事あこれ師走の事なり
年の暮に紫宋とさて六条院に方此方の女御
たちへ遣はされし紫の上へ紅梅の衣玉鬘乃方へ紅
山吹衣明石の方へは白衣をかちる里へ柳条乃衣
末摘花へも同なし空蝉へは山ちれし衣のきぬ

ありこれとてあるひいかとうなあるしに拾し
いろ〳〵やいろといつかなとうなあるなのきぬ乃
事さ拾低のうるきなるるかよ拾うしなるとなて
ものうしのかあるなさ今や〳〵なるいなぬのさて
世界藏菓子といふもあるこの菓子は事さ出ふ
あるとなるようとれたちていろこなさなるいなるとれ
こななさいの世界の上れの〳〵衣とはらむ是同さ
まやとれなりたこれと衣のうこのまこ
一玉繁乃なるひよ九世とるそうなるうなる
あるしは上の御膳の姫君菓子院へ入をて紫花

上の養子よりなるしを世界の院の話をして
まゝせんとて為てよかしつきまつりて紫花
上の御ふなりの為あるのとて記さしを
乃かいなしてて入まんと思れある附家
花世之為の菓とりけるとをそのてん
子上せえこ乃を育まるる日紫の上
○とし月と出よひれて姫ふ〳〵為の
そつ孫さうせよ　世界姫君○記なりの年
ハ中れを為の菓なられの祝を日ものも
世界よりて世とをまそう為ふこ

一此葉を歯にあてめの祝といふ事を葉にあてめ
いふ〳〵はれども俗のよう大根のと面て
そるるとふ之元之の事こかくと読もの
とと〳〵葉のと〳〵をせめて〳〵
○蔦紅とけぬるいけの浪よりなせ
うけとなるつる 蔦紅葉のと○ゆるき
いけの浪ふよりつ代とともむうけて
えこゆと
一此二ケ〳〵ひよ小蝶胡てふ昔々大内ゆも院も
重の源氏とて重子の姫うめよ姫とよりまも

大法令ゆりこれい仁王会大般若会之芝の藤葉
の芳節秋好中宮ゆ行幸ゆ此姫とて葉の
上秋好の中宮方へ渡の親よさ〳〵の花とて
鳥とて〳〵て今の親よ山ふさとて蝶と使へ
〳〵まい〳〵せのふと〳〵く ○花園の小蝶とさ〳〵ゆ葉
ふ秋まへ知やうと〳〵へんらは これい乙女の
よ秋ねの年二ケよりゆ〳〵乃花紅葉とこ行せく
葉の上へ心〳〵そのまへその八歳中と八
紅葉を見のはてよとに〳〵よ 張らを色し
此の心之と敬ゆめと尚元の世根

ふくもあれらようたに扶とれたりの尽されい紫
ちとハまとあひしのへたるみあつ生かく医ち
ゆ所世ハ中之家○小そふ生ちさ行れ侍
心あれて八天公ち紀の侍ちさりせハ世奇ハ小
世のあを胡蝶といふ一世ハ世方世ち
より奇と詠ちくむうへをもつて柏木焼尼
たそうの中将の事也　玉うきちたと紀と
こハより玉鬘たちたたたたのつたたたうこ玉鬘
○思ふとも君いとうてなきうつ思ちる水ハ
えとみて世奇れよ小の人とそしの八思ちち

中将といふ柏木たゝと恋世たたたのつたと
そうの中ゆのもとの御門の膳こ玉鬘八思ひ人の
後ち一世ハ世ちよ曲水の宴として唐ハ姫皇帝
八内裏ハ阿坊殿のうつてハと場せ多ちて恋
の世ゆよ船と侍てあと事とも鉢ち侍ハ
世しちたち船の門ちゆ思ひの奇ちとう
一世二英　芸ハ世ハとかうとハ事ハ
玉うつの門侍ちハ西の宮ふれこをせハつ紀
ちつとを侍くの公逆心とうけちつ中ハ源氏
八御光ハ兵アハのうちやふの門侍ふうく心と掛

源氏之五月のおろかなるを思て来て内侍乃督の
乃内へ入てまひとり斗ところへてまうつる此
うつくしきをみせんとて蛍をとりあつめ置たるの
内へ入てすふときに蛍の光りそよそよと見ゆる故に
蛍ともいひけるにて蛍兵部卿の宮○御事出来
のまたさきむしの思ひにて人の心をいはさしくれを
なりハ　此巻一まうて○兵部卿宮見せて見と
伝ふおかにうつろひそのふりかかる思ひなりより
此哥故にむしの光りとかうせるにて　又此哥故に
わかるの哥アやとまりし　云々アやわするれば此巻

此蛍の事ハ河海抄ニ有り

自ふ云アヽ同云院の御子也　源氏弟兵部卿の宮ハ四十
の弟也　私云一ころ大内にて女人の女房にて物語りさ
る人の名和泉式部　此紫式部　赤染衛門　馬内侍
伊勢大輔此女人同心にて大内の庭の清を掃
しあの殿上人宗内まで行渡みて此女房と見る
ことに於て五月の夜宮すれハ蛍の光ひかりて
と見て先さ記せる女房　蛍火乱飛秋已近と云て
又なる次なる女房　夕殿蛍飛思悄然　とゐす
むく又次なる女房　△　なくむしのこころにむしの思ひて
よく　亦次なる女房　△　声なせて身をのミこかるる蛍こそ

[illegible]めの女房かしさうあもいとそうかう
[illegible]殿上人所望なれ初なきをすれかあ[illegible]
やかうるる山吹の枝のうつくしきをいとあれば
こうやさしさ[illegible]

一此巻并閑僧菱とハ玉うるうのまゝ[illegible]
ふ唐桜ゑ大和桜ゑ[illegible]
[illegible]

催馬樂ゑとうるうへ[illegible]
玉うるうへ[illegible]
[illegible]

○桜ゑのところ[illegible]
[illegible]

れ也一玉髪　○山賤の垣ゑすかる桜ゑ
[illegible]　山賤の垣[illegible]
[illegible]
のこゝ[illegible]
[illegible]一此巻ゑ初の中[illegible]
[illegible]　○第[illegible]
いつてあひ[illegible]　[illegible]
○[illegible]
よ[illegible]の雲

一此ゑ并[illegible]
[illegible]

年五ゐ琴を打しへをせる其中にい
神しゐひろ錦とりてしゐよりかりゐを
もちひる年○かりを次に高ちをふ意化
りりこそ世をちをせはりのとりを
四五一玉髪○行傷ゐさ京を京ちてのかを
次のたりを毎つふりりなる孫て世音ゐを老
とりかりを次とりふ心
一世六年野分とを八月の比鎌を大風吹て
六条院御殿世方の殿ふ紀伊ふれ
もとりくれへこれを野分と云世風の野分

源氏殿ゐ御ちをとりひとを方をを
ありのとを年○大ゐ毎の萩乃葉すると
風のをを化風を
源氏玉髪へ○吹ふる風のりを紀ゐ女部紀
ふりれしぬ玉髪すれ 四五一年
○白露をりひりを女部紀あを風を
ふりれををを 野分のりを 又音○風を紀
玉ををを毎を夕をもわをををを毎を
夕音風の野分を姫を京の上髪
孫をれりをのていををををるりををを

世にかくれなきものなれども
源氏これを源氏の御よろこびとけ
ものの因果と

一此七年　御幸これ十月のころ御猶の為に
法泉院小原殿御幸あり公卿大臣郷
宮殿上人これむかへ延長の御ゆかり
あり例と延長の時白義と逸物の
ゆかり寄とそれより起り今
もっぱら此法泉院御製に　○言葉の心
かなへあともなくよよ

小姫と大原の寺に
一此八年　藤符これ
○此年の三月の大将宗盛の方へ
かことをうと心を
なれ八年　よ
て関白とも
内御とのの御妹と源氏
くく寄野のうり
御源氏なれ
ることハなもく
小姫と大原の寺に
一此八年　藤符これ
○此年の三月の大将宗盛の方へ
かことをうと心を
なれ八年　よ
て関白とも
内御とのの御妹と源氏
くく寄野のうり
御源氏なれ
ることハなもく

あつまりとけよかしとてそうしとい歌乃所なり
所ゝハ歌しゝ哥とも多きしこゝ髪いとこ
なりけせしむうゝ　○寄ゆるゝそうけさ袈裟の
雲海ゝハう仏法ゆかことなりまり　つまれて
まていなりといゝるそと云ゝ　多雲此寄さうち
そうゆゝ自ゆてまいゝゝせまりつうの法と放
そう自ゆいふなり
一此九並　志本拒こゝ仏玉うゝと記け玉ゝ将
歌思ゝ多ゝくゝさるゝ　ゝかるゝ拒大将を舞ゝさる
ゝ舞ゝ之志ゝるゝ思ゝ　ゝんなゝ不ゝかゝ

玉うゝ　○拒ゝるゝゝゝゝハゝんゝゝ
ゝるゝ川人の世とゝゝ地ゝゝゝ紙
世ゝ玉髪　○三瀬川ゝゝゝ紙ゝゝ紙
なゝゝ拒ゝ乃あゝとゝゝゝん　心ハ三瀬川
ゝとゝいゝゝ三途川の事ゝ女婦ゝ死ゝ
ゝ拒ゝゝゝゝ死ゝ婦ゝ
ゝれゝ仏ゝ素ゝゝ拒ゝ死ゝゝ年
の寄ゝ仏ゝゝれゝ三途川ゝゝ地ゝゝ
なんゝゝ人の世とゝゝとあゝゝゝ
拒ゝ　一髪ゝ大将ゝとゝ仏ゝ拒ゝ紫上の

膳をとりあげ給へとたのもれもをうつくとうたよ
いろはせやまとて業乃上そうそひとして受け
思をむこまとり給ふさて大将のせしと会せん
とて装束調て寄をとあ給ふところつよとの
門をしのいりみも大将出そせそむうつ
うるつかよはせをせるとしのあるとの
きくうて寄をとあるつとこ後さりて接
ゆうとうとうい給ふあひこ寄乃使これて
装束なと取きて酒之こを夜に物のらた
みて　○心さくそふこれしゆさも業ふ

記とりさうつるかうしきのそて　さて此そうを
小源進出給ふこさて出さり給ふ時この内乃
膳よ十二三の姫君おいしきこれを出つれ
中おのの此姫君きしらの彼月のうを
詠ると入給いて給て　○いはとて宿れ
とも給ふ此きつ乃柱よ我とをる物
き世の心る　○なれきとい思ひいつしもるのより
をらと角つきき本の柱を　此こ砂をの
名をき玉本をしらと云り姫貴の大将をこ面
うをとひをうく給ふ関白をとちの子とも

あまつ雲おほ空にて栄へ物うつろふ大内の四月
とりのあしくはなる北の政所はなほ遠ク
一ケ月心よこれとそれ不しくおぼしめしてかの
ふ鳥のまとそへて奇とつくし給ふ
○れる一巣ようしうひとえぬれいるるの
巣ゆこさるん　心ざしの巣をもて　ぜ七ちる所
とれそてみこさるつこさと云事こ　出典
姫君の大将　○巣の見れるまもわるぬる
乃ようつくしかるかくつき
一十八巻　梅のえこれ源氏ありしのこの中をを

まこ文の后よこてつきとて六条院ゆく句ひ合
とるしのふこれい祝ふこの方世方より名を
姫君のこへをせこ撞の母院より況の筆く
ものと入る陽隋の意を二つもてて一つよ生を
一つハ紅梅とて黄すれこる物の移ようる球
つけてをせ給ふ　○花の事ハ散らしえこを
とまるとうん神ようあこくこまめ　仏も
居ようこあといふ祝云ふ世奇ケ生の名を
を梅うえと云こ出典　御前ようる花見こ
とこをせて同色のこふりケ　○花の枝ハ

いと心をこめるるあんばいとて
ぬし　そふ奇ともおもはるゝ　なぜのことゝ　高倉の
と紀國屋ゆりて奇物とてのひらさしかけて
まったひよ奇と渝　私云公家よりの白手まの句
ひ会あり　時との花をとゝて　物うえとハ云よ
とゝていこ

一十九卷　花の裏葉これハ光の御子夕霧
大將雲井のかりと心よりて　思ひてこしまま
父乃大臣ゆゝしゝるて　我ら有よ　歌ゆ了ゆる
そゝろともおぼしめし　夕霧も雲井のかりもまか

ひよ　嘉　暴　ふゆ　父の大臣もしもかくもとて
夕たさりと　奪よ　せんと思ふ　夕霧　とよひ　て
いろこ紀花乃えさを　ゆゝ　内大臣
○とゝ中と乃花の　紀　きそゝれ　多　稲やゝ
こ　ハ　云のなゝり　球　是ハ　奇ふ　○朝日さた
花乃うゝ　葉のうゝとけて　ゝ　思ゝ　稲　たのまん
世ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
心　奇　ゝ　ゝ　巻　ゝ　花　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
出ー夕雲　○なゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
花　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　夕霧

よりこれをもて酒高坏とし給ひ給ふ事を承
はりて四方拝の儀ありやとハ戸惑しとさてわれら
ハ御をゝく来まし　大君と舞ましとうらやめり
催言示　一年ハ多賀の舞ありて
またあるしの姫君と出まそて作よ入内ましまつる
まつて御殿ハむりし桐壺の更衣のまし後世伝
それ〻立をせらるゝ御年ハ十二月中旬なれハさ
西〻の女房ならすとつゝて御使ありさ為さ
中てうりなれこれ出まそて　ハとり　此九まて
大上てをよ御伝て　冷泉院六条院へ行幸同

朱雀院と御年ハ十三の高麗ゝ
参すし給を伝たいしませハ朱雀院ハ
やして　上ゝ　対　花ふ正　をせの　うさて
酒高坏ハ青海波　と　洞ゝ九　　菊花　と定め
の　御　源氏　桐壺の御　の御　の紅葉の賀の　附　
紅葉ゝ菊の花　を　折ゝ　青海波　と舞　
年　○冬まさらまの紅の菊　をれりゝ　袖
うちゝけし　秋　とさ　さらし　世年ハ　ゝ
二番の御　よ　母　桐壺　更衣　この　父　阿闍　大納言
中ハ　中将　○世年の　まつひ　菊　ゝ

濁り世の星とうたへる　朱雀院此朱雀院は延喜の御子
世にこそ後にはこれ腹

秋ぞ　冷泉院　○森の下草の枯れとうたへ
いましめのたわしまを元とする意乃徐と　此行幸
ゆうて年と信はは冷泉院と信とかの
つ自元年に桐壺の御ことは御子朱雀院
乃おもなれいさ[illegible]の法人なれとも
地位を捨てさり人を交はあり[illegible]
人のかくのごとく上古なりと末代なりもわしう
人ことゆうさ

一廿卷　若菜と云ハ玉ふ[illegible]賢王の大将殿方
ふるり給ひ[illegible]いと大将を関白とそちの[illegible]
大四の四月のうしとなりて若菜と二人とちの[illegible]
正月十二日初子なるふとられとらまれて年
いとう若と門つれ参給ひ　○若菜さした野
色の小松と門つれ[illegible]
[illegible]　此[illegible]　○小松原す[illegible]
記れてや地色の[illegible]年とつむつさ
くくのふとくして酒宴ともゆう　千秋万乗
と祝ひ[illegible]
此[illegible]

有法了円より始まる事あり 酉の年の
祝祈禱とせるを円了の始めとする
年円了の始めのとき紀国御堂寺の住
祝云とりくふるを 一東三の所わかしの腹
の姫子此世をすてとうこやとまふけ給ひ
給こやの朱雀院のもとに御源之此事を
あらしの入道よりの紀之とうこの世の所
とすこしふやせしに成給せりとてこやこへ
人とかわせ中子の所つも我小のうかま
君に対面之後祝とやの此事伝者へ

言葉を立中を言葉に成給せりとて所文を給へ
今の初せまさ美想のあるよりとかれなてのく
せりけりの入道○元ういてむあると記ちく
物の美を今をえし夜のそのうとりすれ
此姫ん給ないれて於へのかせりこれと美はつ
を美うるとを之若君のいてきり給ふと此石此
上の世のこのよろこのひすひく○花のるこがひ
あるうふをちあるをあまをこれ
とうめん 一あり入道伝者よ立京やせし
孔廟殿の史上此立京をこしに伝者まふてぬ又

る所とあらしのよまあま君も紫の上も住吉へ
参詣ありしは十月廿日之松原にはるはる車立並
ぬさの神あそひ御神楽なとありて又音楽いろいろ
酒宴さ海人をうたへとも名の高とも詠歌て源氏
○誰かまた心をしりてすみよしの神代をへたる松
にこととふ　あま君　○すみの江をいけるかひあるなき
さとは年ふるあまもけふやしるらむ　同
○むかしこそまつわすられねすみよしの神の
しるしをみるにつけても　女御　○神人の手に
とりもたる榊葉にゆふかけそふるふかき夜の霜

紫の上　○祝のこかゆふうちまかひおく霜は
神のうけける木綿かくるとを
一萬葉の下これは　女楽と云事の時の朱雀院五
十の御賀ふ孫子にも御算給るこれは五十寺の読経
といふことありこれは五十寺へ経をわかちて法花経を
よませらるる之五十度護摩の祈りする之五十てんく
とは数の満之ありしを五十まてかそへて
小数の満ぬは七ツ中の満ぬは廿一大数の満ぬは
七四十九之満ぬはたえひろく五十といふ之五百と
う紀ていふ残とよむ五十とうつしてはいふとよむ之人の

緑生と帝ふと思ひ出でたりふく満ちたるこれをて
殊数の七百ふ乃満ち廿一百八中の満ち十八
大乃満ち南方ふ思ひ出でたるハ百八なれハ南方欲合
百八ことれハ百八の煩悩と云やしすることの因
中乃三七廿一ことの百八乃中乃ハ琴すれ弾ず舞ふを
なれるこれをなれ
なふといふこと乃ハ琴の琴女御ハ笙琴
あらしのとを琵琶
乃ハ琴琴黄黒篇
乗紀行之此時うつくしきすることも花乃

色とふふ世乃中乃ハ
いと花書風なれ
をとへ忘もいとれ
姿なりあらしの
高楷ふ花乃花
なりあらしのと
匂波ふかのうち
山さしつふの
ゆしさしてい
つけ給ふとふ

一条院内道世の
西ふ院居あんと思
ふ方世方ハ
ふとの方世方ハ
琴の音これとハ女二の音

と中柏木の衛門の督ふる姫のことをも
とけ朱雀院いとおしこえ給へるなん
やうくむかいとりをくに立殿へ入給てれうしつき
つねなる所に時々はかとし昼ぬこ水を
々昼の宴すぐしたまふ中ぬ
立殿ふまして々
はちさうなれい紫の姫姫をたらつる
なる所々に音をせ給ふ紫のと
○朋ちく秋や来ぬ
いろつきよりも

水鳥の羽ぬれてのかもしと萩のうわ
ゆ紅こと物か秋を
院より入給ふ中ぬ
いろせるふと思ふ
心をさまよ動くとの
々しく年のふと紫
おほしめし院より
世世のこと
れ心ハこの子ふ
ゆ世の上

○そむきふ
山の
ほ
ん
ハ
ほ
ま
し
と
れ
ぬ
○そむく世のう

わめきくるさうこうきかうしとそひく
けなそなれそ
一ぎの赤ふ宮ぬそ〻うみさうして西白宮
〻〻女こ乃こやぬ物の前の庭ふてなの
中将宮ゆる中将タ宮ゆ公遊まりと遊
らそ〻女このこや孫こと明孫方れか
犬猫とたをふれるとて博ゆる縄ゆ元りて
御簾とりあるとの丁たりかしハ犬猫つ
女こ乃こやと一日ゆ人をくわれ問ゆ女こ乃
法師ゆそうつしられも女こ乃ゆ射つきふ

あるにこのとれ人まいるせそわしうり悪の猫と
なるゆ柏木の犬猫つ女このこやと我られ問ゆ
て孫り○ところ〻前系とをるゆ元りひ
んなるもむまりきうさうなれとと　御あ
犬猫の市内と前系と云こかくのとるわる
さて犬猫つハ悪ゆここて飯食ゆして思ひ
悩孫ゆ世こ乃ゆ別の猫と盗こかの猫ゆ
なるゆて孫り○恋侍ゆ人のかこことてる
ま八ゆふよなふとてなる孫るん　我ゆ前くる
と猫ゆよもて孫るとハ御ゆと云ふれとひよ

志つ心なくもあ紀こ かゝるとこゝに女三の姫宮
乃乳母侍従と云ハ柏木右衛門乃かミの母めのとハ侍従之
あれとたのミて女三乃ミやと一目見をこくよりも
思ひよ流むこと申しとみるとそもたのミて侍従
あさけりしやとうけり心に思ひよらさるとや申て
いふ心之さうく恋の病とこゝていゝよせんと心まよ
かる折ふし紫の上遠例の仏悩あそはやこ公
かすりさる所ニま乃件紫の上まつきそひ給せ
たハしきこれとすきと乃路て右衛門の督と女三の
こゝやのまし海乃丙へ川いろ之こゝやハ志ろし

めされ給ひて乃件ハ其思ひハまさりけれハ今ハ御所
遊ふとしゆへうつさるゝとの事なれハ人そのかたハらか
さんさま鬼神ふとられたる心地して大将紀
て此程にもらしきゝ思ひなれともかなハれたちさりと
おめ給ひて更に右衛門のかミ舞ふ ○或て行そも
志られ女あけ方まいつくの前後ろそてらな
登り 女三の宮 ○あけ方の北くまうき残ハ
こゝの月の盛なりけりと見えくもやむ事
一紫の上すこし心地よくおハしまして紀の遠
小乃件 女三の宮へおハおる折やしこやハ右衛門

まいらせたるなりけりと見て御衣の
のわに押入て石流とて石流と思ひ
かゝとそゝめきたれとも
それとそ云りのつれ物の心はしまひて世間
紫のとこうちそひて久しく音信なかりける
頃ものとまそれとそ思ひ給ひ給ひ
てさてなほ物語をしてなかなかとて
語り附女三の宮とたはむれ給ひ
しそ月まちてとの給ひ給ひ
○いとやうやう過たりしつ月まちてかれはせこ

そのまゝふるえん　と云心さゝそと思ひ給ひ
とまりて語りさゝかつるあしたなる扇をえらとて
此衣をとりあけて御前に出給ひ
これとそとりて年ふりぬれ古歌のうつり行
女三の宮をもなつかしみ給ひ
のこゝろかとあれとも此ゆゝしきなるなを
をせゝすることをうれしと思ひ給ひ
なと思ひ給ひ女三の宮の御
御衣の中に入給ひ
作せる人れとも

おぼしめしあまりて侍従を召入給ふ
右馬のかみ乃本の御前へ参給へ
のすんとすると云へ
とえんて右馬掃部ヨリロヒク思ひかけて是より胸さわぎ
所とき一出仕をせずして思ひふさぎこうち
ゆてようつゆよりむかしくなる遺例大事ふかく
きく今の余きハまた時侍従して女三乃宮へ
奇ををせ給ふ○今ハとくとえんをうとと
思ひたるのもぬるかりのうたやのこさむ世
女三の宮○立そひてきしやとれまうし記

ことを思ひこそ侍りけるなを侍りけ
りとかとと云之　私云二首の奇ハかしハ本の巻々を

一二十一巻　柏木

これハ是を中将の事之是号
とをを奇乃ゆ名自之後ゆ殿上人と本ゆたと人此
人とうしハ本ゆたとして柏木の右馬と云之此人
源氏ゆ聞られ申せしを方いれいとかりて
なのすを大事ゆ思れをさて女三の宮ハ御懐姙
をて祇をくとう居をまつけの了源氏ハとう
子ふをあるとを生給ふ御ふて我
子のとくをみ中日いを文四年ゆいなをれをとりれこをいを

をうせられぬれば、なんぢこそひめこの事と
申さんとおもふ程に、ひめこ、父
のいんぜんの御出家のいとまをゆるさ
れぬるを、ふかくいつるそとしめ給へとまかさ
れてやのもとへ如来の立世と 惰景(キヤウ)涂 耶(立)悉多
菩提心あれば、高つぼねを行き入りぬれば、
ひめこ、ちかくもとてもかのそ
なりとまかくもとてもかのそ
れ、をそれふかめく入道のこやとやなり
見をたまのくしてゆくく思ひよたく今はかと
ひこるおもひ源氏指ふて大彼云ふ事ふて

たまつ乃うこかさしもをくそ今 皆ゆ中をそ前
夕寄の大将をよひとたの入りたの事ふ家その之
事国ちくのうをとやおき送云とふ祈こうを云
死せり夕こうは大殿といとこまく夕寄の内室井
のうりは枝大殿の姉さ仍川ら夕寄と和合源氏
夕こうのうをとこさしめしてあはれ思ひ
給ふ大殿ふこは笛の上手ふ管絃ふ附ふ笛の
つくこ名と高ふる笛をとてう為その之乃
そうへとして夕こうの大将へ此笛を也給
ひさるかとよ夕こうと細こおちそのこやく

言伝しのうて文をとりてひの音をきいて世を捨て
一右馬つかさ修理大夫殿の御子
中そうなりしあまのいとすぢ六条院の御子
のことをとて　殿ハ年の御前くいさう殿
女このこやゆのくいの年　○北の方世を捨てき
ぬしとて思ふの松をいとこそえん
女三の宮やみ奇をとこそ捨てかくとうちあ
ぬいをて今の世奇ハ古今　○捨しあれハ思ふ
松をあひなまし　京せしあのあとさめやそ
今いふうるとかくとしあとそしく捨てを

まこと心を捨京極殿　○捨しあれハ仏
乃所ともなるねしと思ふも云ちおのるものを
一右馬つかさ死をハ二月と父右大臣なを紀ひて
○木のかの京よぬれてさいさ海よ嘉の衣さこそ
そる所　すこの衣とハいろの事とする
花衣ともいふこと
一二十二巻　横笛これ公典のうち地小の方海京
乃こや市ともれれこるひと一条院のこやり
すし海ひとこつへりさひく糸海了
そこの心を捨ハさるあるこれとろく念一なて

侍る時八月なかばよ月のおもしろき折から一条
院にや参り給へ母の御息所和琴をし落葉宮
箏を琵琶にてたまふところに夕霧柏木の
弾きて落葉の宮やまひもせ給ふ笛をふき楽
を合せられたり御息所きこしめし柏木の内へ
よびまいらせ吹せ給ふ時にふるき相夫恋といふ
がくを吹せ給ひ御息所きこし召し
○露しげき葎のやどにいにしへの秋にかはらぬ
むしの声かな　夕霧　○よこふえのしらべ
はことにかはらねどむなしくなりし音こそつきせね

此巻の名をば横笛と名付たり
一夕霧の大将より三条の御方へかへりて秋の比
なれハ月を詠て此笛を吹てまどろみ給ふ夢に右
衛門の姿を見せていふやうハこのふえをとらん
ものありとてとりかへさんといふて夢に衛門の督
一首の歌を詠めり　○笛竹に吹よる風の
ことならばすゑのよながきねにつたへなむ
此歌にて夢さめたり　此おもむき夕霧源氏
かたり申けれバ院の仰に此理ハ我子にあれバ
これにつたへんと思ひつるよと仰せり　女三の宮や

はてゝよ我ちよあれこれよつる元と思ふ
を夏のつけし
一世尊の宴 詮出これば世この家す西に和
歌千歳ともそれ為ば詮ず手仲ふすむの歌
とゝ〻のくて入道の宴 ○大うの秋といし
とゝくともつりよてかるゝすむ の歌
心を古原つのとゝ居を依て乃仲ふすさめられて
ふ ゝ〻ゝすてゝ紀といわりめ勝とを
御子すし内侍所すてかる紀と云心こ此所ふ出を
とすむ と名月こ一れ物しこゝ月乃

れゝとしゝ乃紀ふ六条院 人ゝ系とゝ詮泉院
もゝひとゝすゝ詮ひゝ六条院 所内の歌
○重の上巻あるゝれゝ 栖 ゝもの見れ世歌
秋乃夜の月 乃世 六条院 ○月ふけ乃色
重井ゝ行ゝ宿ゝのゝ紀かゝれ
一二十三の巻 夕霧 雲これ一条院の家乃元
藤家の家乃御 母乃息伝の不仏ふ見ふ
山荘とつゝすこし 心地ゝらい詮ふとき歌
とゝゝ小仲ふすし内侍所れゝ乃ゝ小賢へ
系ゝふ形ゝし秋のす悟つゝれ

赤の吉さこへ多さりふりくたちこめて日の澁（サビ）
ところうゝの神と諏訪大明神島伝へ
○山さとはあり水をそなる少雪ふるあるこゝ
るさ心地して　世奇有ふ世世と少雪と
云又このうゝの世（中国の天竺の海家少世ゝと）る所島伝　○正賊の籠と
こゆて立雪ふ心そゝる多人ハとめて
さてそのまゝとまりて高家の家のところへ
出ゝいらせとせりとこゝろと戸城出て酒ひゝ
ゝや　○されのゝやゝう紀世と云ハ多あり
ゆれとゝ神乃なとゝそれつき　大将出
○大ゝゝゝ秋ゝ好ハ衣とゝさせにとゝ打ふ
神ふ秋ハかゝて　ゝゝ小萩ゝりゝゝると
て大将　○萩ゝや の紀源の家ふそゝちて
八ゝゝゝ雪をゝそゝ紀　さゝ少雪ゝ
ふゆれのゝとれ島伝ゝこしめしてといまん
ゝ色ゝ紀ハさ形ゝと芸形ふゝ心のこゝも
ゝゝ情く芸と作せのゝ作ふゝ
○ゝ紀名ゝゝ人ふいゝしゝゝゝゝゝのとて
いゝこゝゝん　と云ゝ分の心ゝ今のゝゝいゝゝ
ゝのゝゝゝ心のとゝんゝゝ芸ゝと

うけたまはり給ふ。

○女御殿は、さりて、ものをいつこととて一夜をあかし給ふ。やとりの屋　源氏　大将　○秋の夜は、屋の上にはさけしかし。假寢のまくらもむけたる　源氏　心ばせなどもをさをさくはつかれ給ふ。ものこれよりてタきり行ふ。七日の日も、御ものこころもとなくて、弟の間に大将を少納言二条の所よりおすると、雪はかりの小納言よりおりすとて大将○うきとうとなりぬるこころ。弟をそのと

とく人如無　さうく。源氏伝七日の節会の後、その夜の内の事も二条へよりて、雪はかりうと同松をくり。世日ばかりなる。○いろとりどりきてゐる。ここらつる雪ぬ。雪はのこと。

○人人のうけすこの

一大将殿のこの人伝ふ。雪はすむ人なく池水のすこと。

○人人のうけすこの隠ろい。

なく。池水のすこと。

○人人のうけすこの隠ろい。

とく人如無　さうく。源氏伝七日の節会の後、その夜の内の事も二条へよりて、雪はかりうと同松をくり。世日ばかりなる。○いろとりどりきてゐる。ここらつる雪ぬ。雪はのこと。

○人人のうけすこの

一大将殿のこの人伝ふ。雪はすむ人なく池水のすこと。

○人人のうけすこの隠ろい。

とる秋の夜の月

一二十四卷　佛法のサロの世ゝ年の所愛

面白あり此多八世部と此二の世をさきはまり

佛法とゝ八紫のよゝ心地まやゝのしてゝ

ひゝよ大事よゝ醫術と行ひに初禍も叶すと

てさゝゝ塗よおいしまさも八ゝかゝと思ゝく

世ゝもおいしまさも八心ゝゝ又たのむゝ多ゝ

法の世を一大事と思ゝく世六人の僧とおき

法ひゝく法花經を部よませて此世を行ため

ゝ大法會を行法花八滿願の行道

事者をよおこゝ多せゝゝ記法事とゝ

題此部よ佛法乃世とゝ　一ゝゝこゝ三の子

とて国宝院のゝゝよおゝ八ゝゝの服居のゝゝゝ

年の世孫之紫のよゝ孫之これを紫

のよいとゝとしゝて生花をせゝゝこの子と

つゝいとしてあゝしの中子（紫のよ

○おゝゝゝ此世ゝゝゝ今ゝとて歎ゝゝ

ゝ部ゝき　世ゝ中ゝ此ゝゝゝゝの世ゝゝ

紫のよ世ゝゝ

○世ゝゝこゝ思ひゝゝゝと

ゝし先ゝて此世ゝ行ゝ法ゝゝゝ

又花ちるさと〳〵紫の上　○老尼ども御法る
〻をたの海ふかしむすぶ中のちぎりと
雲ゝ花ちるさと　○むすびおくちぎりはた〳〵
し大ゝきみのこりすくなう花ちるさとと
世ゝ花ちるこのゝ月ゝ雪とこそ　かくのごとく
かゝせてゝ〻しおかしく懺法(セン)傳經(ヒツ)の聲
ゝきふ又此心もいとゝこゝろ深くなる花と聲を
あはしたきとおぼせり源氏歌ゝ
十八と十ゝ月すゝる所齢いとゝ乃ものゝ
れる百也家の切徒(ツイ)を若(ジヤク)ゝ行るれいとて我師

をめしてかゝとれる所ゝ夏戒とし乃ものゝ年
所れ心ハ美ともうつくしき　おぼしさるていく
紫のゝ上　後生の事ともいろ〳〵勤ましくこゝ
ゝろのあられるほしきわ二乃ゝ事とよしまゝも
て頂とうれなゝわかゝゝ此ゝ家ふ居ゐて
梅(ハル)梅とふらんあしもおれもあれも三乃ゝ
おゝるゝ所心ゝ涙をなゝしゝ乃ゝ先ゝ山梅と
ふ所れとゝん涙ゝすゝこしたきゝ乃ゝて紫の
とさいこふ　○わくゝとゝんゝ乃ゝてゝをゝりゝるゝこと
をすれハ風ゝこゝろ萩の上露

すきし世のあしたふんまいせるあさぼらけ寢
こられこのうつしき梁をふまへていうな
形ふりとうと神ん祭しなはいまうそしめ
りかたるむうひ海をうし海びうタ
寒しくの秋乃タアの高しきよ八月八日
しあけれの景　いよ〳〵と神ちのあるき
一夕きりの世蔡のよ地ちきよと八月八日まき
八月之比とこそ知うそ夕暮　○よしのあ紀
さいまの心地して　れうし神よ高てるを
堂院　ぶんとい年のう
○西海ちいるむかし

すこし　おき流ふとい年　えのひく　○海と
せいきとあるそふ高の里よ松てれさ紀多つ
ひとすと邦　中高紫のよ地なうこをけて
○秋風よ高しとまわ高の世とた　れ景え
のとたのまん　かくて八月十四日ふえのく
う流て流の出るけきなるく中えうる
大門乃ちうかきう性人ち紀ちよ
ておハせ　れよいうる人とおしをせわえ
う年八四ひうこうえてタきりよ作年
られうとうおこをいせるうタ書行せ流府

いまも花もみぢ秋のせとつゝまれ
冷泉院の伝授ぬの中巻○かれゝゝの野辺を
うしとやなき人の秋の心とゝわさりん
紫の上は秋ときゝひしの秋死去のゝ了
と云心名部ゝゝゝおりゝもとりもせゝ
四八節とをしかれしゝ仏法の巻と云
世ゝいんゝのゝ○不切ゝ中ゝ
かゝてゝえよ秋のあきゝゝゝ常なる世を
一二拾巻　初上の巻と仏法ゝゝ法花経
名ゝ聖徳ゝ世ゝゝとまゝゝゝと云ゝ花の心を

法花経ゝ源氏ハ法花経をかきあゝゝあり
さるゝゝゝ世ゝゝと幻と云ゝ八月なゝゝ紫の
上死去ゝ秋ひゝゝせゝ日の節百ヶ日の節ゝゝ
ゝやゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
院のゝゝすゝゝゝゝ
ゝゝゝ院ハゝゝゝゝゝゝゝの名部ゝ院の
御全才なれハ御ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
なけれ兵部ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝをゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

をとこ[illegible]れて落さてうて帰と院

○[illegible]花のあるもるを花やとをこと[illegible]

[illegible]てきの雪　雪のすゝ[illegible]れハれと[illegible]

[illegible]つし心吹花の花をとを花[illegible]れるを[illegible]

[illegible]いと思ひ[illegible]いん　○い西[illegible]

[illegible]人の心とめしるの[illegible]

雪のすゝ[illegible]のとこさ[illegible]

て○[illegible]

[illegible]のとこ[illegible]

[illegible]春をて花ちる

[illegible]より文夜の夜をを[illegible]

○和こ[illegible]のうをきこ[illegible]

せ[illegible]いとかれしき　そとはせこの和[illegible]

れ[illegible]せこ[illegible]花とのこ[illegible]

[illegible]むなるを　一中将のきこと紫のこの

家[illegible]入こ[illegible]女房[illegible]

[illegible]のまを行[illegible]蓑と面[illegible]畫寝[illegible]

と院流[illegible]て院　○さとこそいよ[illegible]

こ[illegible]ふ石さ[illegible]

[illegible]のをとて院　○[illegible]花を

[illegible]ぬれやきる山[illegible]

れ廿月のころ城のうちまで拝見
ゆるしをせられんとて院○つれづれとわるさ
うに黄の日をかこつ白一日七月の声々
六月とすさうの秋よりしかるかゝ花ゝ
さびしきあり蓮火机飛秋已近るとみ免
給ひて院又夕殿螢花思消紙を張給ひて
いん○夜をしらるゝとんぼかゝりきた
時をもれ思ひなりて七月なれて異合
とうとんとなるこゝろめん○七夕のあつ涼い色地
よりもえてとりれの海ゝ家ゝ松ゝ

さて八月半それ海第上一回忘の弟地作事
ふ法花法をかさとせもさうの作出ゝ
て五年と思ひあしゝ仲将世房○君意乱
なるこのことをなる紀とのとゝいつれのてて
いらかて　北斗院○人歩る秋を飛とす
ゝるゝ月れのうりあるなるゝ
九月九りゝれいゝ雨おきてひゝ菊の花も
吹ゝ月ゝれい院○ところゝふれ紀ゝ
菊の朝露とゝとゝ袖ゝ風秋乗
ゝとゝ十月ゝれ付和ゝ月ゝ　乃明房

来の相かれ給てこのさひしくあはれな
れや　院　○大宮よりかよふまろかし　芳子
見こそわるものゆくゑもしらせよ　世尊院は巻を紅と紫
一次　二月　海月と紀伊世方より　寄とも宗
し中よ紫乃上より　一分ともとれあり出流
ありて　院　○かこつめてこるもるもの　藤原
業おそしこそ外のそももるれ　かく
思ひ　人　心よ　紀　やいん
とれしのけたき　ひろ又　○死ものゆこ
人をとふとてあ　とどろく　行やゆとん

ゆとい筆の跡乃事さ　霜月はめ　言ものて
ようなくさむくなれ　沙汰　とを　れり
言乃ていけ　ようなれ　あれ　思めし
の時のころよるれ　中将　人　病　寄
あるとれら　まして　○こや人　世の時
そ日ようけ　ようし　れ
酒つきて　院　○　云　その命　ろ　用
ふいろはくれと我の　も　と　中将
○世のこと　つき　花と　紀　我の　を
言ととふ海　さく十二月　四日　院

○相模ふとすくな風日をもちゐて原年も我が
所をもちゐられぬる

一二十六巻　雲院世尊さまの　世尊とも
御法ひろむ世界しくうりの法を者廿六雲院乃
世とと云て源氏ハかくぶ法ゆ花ハ法ゆ
ゆ帖おもふのさたなり　白兵部ハ蓋大将なり
敬語ふとかきてりれり　私よ云ふる兵ハ白人
の貴白兵ハハあるのと姫君の代腰中文
ハ代ふるれハ源氏の御孫ハ又うりの大将
女三のこれ代ちうり柏木代大臣乃ものおなてい

りんしの御ふと

一二十七巻　白兵ハ兵ハ白兵部ハかりの大将
女人の御ハ白兵ハ白ふハ中文の代腰源氏代御孫ハ
紫尼の養子ふれ中いと御ひろ一大事代とさた
世養ふすこの人ハ御ひろ居ハ元服ふされて兵ハ
代親王と中ハかりの大将ハ常ふとて我ら代ら
世ハ代ふりの大将と云ハ代ハ代ハ常ふ
ハ乃ふ白とたきしの者の如とも光の中ハ
ものこの代ふ白兵ハ代ハやと中ハ国云院ハ代
ハハりの大将ハ女三の代ふかハ八本代

思子之方の人と名付 さるこのことくかしつき
給ふ志れとも夕きり殿ハ人てしやらさん
中々かろとハ劣りたる人く 世間さんせさる成りし
宮んを思ひ給ひうかりの君 ○わかつ給
られよとハ悔しいかましてえしわとえてもちら
ぬ我ゝ陀て これ共我か身のいられとも思ふなれ
す忠の宇治の巻ふてあらいかへし此巻人也
ことに残此巻よろしく之

一 此巻の并二巻ハ 紅梅竹川也 まり何かうもい
と云ハ其按察（アセチ）の大納言といふ人なりこれも

大将の君おとゝなり花宴の頃栄給ふなり
此御内ハ蛍兵部卿の大将北殿之 前より東枝より前
うき入らつれ給ハ御給ふ姫君之 それしわハ蛍の
兵部卿の宮ゝ給ふなるか様に大納言乃こゝろの方
まりわかり 此姫君まし 御乳母ようつゝし紀
紅梅の一えをたてをりくころしえんのうすやす
此君をとう紀の子北方君よとらせて匂兵部卿
乃此うらへ ○心ありて風のにほはす その梅よ
まつ鶯のとはすやあるへき 此哥なとに紅梅乃
大臣と云之 大納言 ○もとつ香の乃まかハた

君をてふれたる花と云るはなれや地蔵
をとつるといはもとちふるふるふるれ
一竹川と云ハ賀茂の大将よりて関白とと
もるるるるるるの姫君二人ありいつれ
うつくしきこれと多きり地大将殿年のう
ちたるるよ姫人の内と云人を此姫君と心よ
うけて竹川の殿うちいて一所ハ姫君心の
花ハ人ここや此姫君○竹川よ夜とるる
ふとるれしるいるるるるを思ひおう海し
世奇なる竹川と云ふ

以上六帖四十四帖の年

穴法十帖

一夏一 橋姫 世宇治の老ハ又一所の事ふを
根元ハ桐壺乃帝門よ八人の子御法皇八番ち
乃帝子と優婆塞の云と中父門いと和ふ法
ふを加よ朱雀院乃御也弘徽殿位ふつさの
りんとてにくこ中法了源氏ともよくとおし
まさぬ別腹の子ふ御有八条あるりにるり
元ハるるているそ木ハしき又かのうとそ姫
君二人ともに法了此姫君母ハ死去なり

世をもやまとことばにしたがふことこゝろえて
○えしらのやもりかゝりふしかゝるふとてはれ
やさしのこゝろん　さるかとふかすても
宇曲とこゝろ乃又国まゝ一の御子惟高親王を
小野の宮くゝ引まゐらせおかしめ給ひ姫君
京様様ゝ宇治へ引まゐらせおかしめ給ひ姫君
二人つ思ひもうけ給へて世繁(リシ)おろし
うゝくのうやとうてゝ行すゝ給しておかしき姫
宮をもおかしとこゝろよおもひをうゝこゝろ
秋まゝ一月に不ゝにかはしたおほしめし

宇治川のおよ御所をとゝ作り給ひ川の南まゝ
給ひ世ゝくのうやゝ八宗書を経をよく学
奇乃ゝもゝし給ひ給ひ乃ゝの大将源氏
たゝふゝ給をまゝ給しゝ人とゝと詠給ふ
これをゝ給ひ思入ゝもとふゝふしを思ひ
ゝ乃ゝの君さしゝ宇治へ行てうゝくの宮
物乃ゝ世ゝと思ひゝ給ふ給府　○心あゝし
毎ゝ月木の葉乃宮ゝ宮ゝ給ゝくゝゝ給
ゝゝ給ふ給　世二人の姫君をあけまゝ給
の大君妹とハ中乃うやとゝ

一ところの君心ちのとせんの形のうちより
のぞき給へば琴とひき給ふ笛
絃をしてまし給へば西院の姫君とうち
乃君淪泉院よりの給へば院もとより世の
なれ給ふ宋しくおぼしめしたみまいらせ
○世といふ心を心よこのよくとも八重ふつゆを
なうやへうちうち　院五しうえうのこや
○あとたへて心すむとはなれともせどうしこ
うちとこそこれ
白無垢をつれまいりの方
一行の時うちの方
いりもて宮法へまいりの人は

三ゆ八ゆうの京法淪のもとところへまいりの了
こそすよ妃殿君ところおりすところと思そ
尺殿八あるゆうあこと月姫君をとう殿
管絃してまし西院の形ふしいるあけは
月をようこれこ周なれ八琵琶のそちそ
月とまるこて扇のても月を抱西りこさや
妹のこや乃殿八あるゆ殿こや八琴とはして
ことよりかをて月を詠まうり形ゆし秋
これ八鬼よもむ有もゆこゆふ月すこ八ゆ
松風ふもこて和のこうさゆこのうなて

かりの大将　○楊姫の心とゝまりて老をさ
捧の宮よ袖をぬらされ　宮姫よそし姫
そ神をとゝまりあるこれよりせを御世界
世をとゝもし　姫少て名ばかり
一世をよ右馬つかさ乳母の女房奇の君といふを
さの人西国の夫任の妻ふりてゆる又故へ
乃ゆかのうをくのうやもかゝもかゝもたんさい
なれハうちの姫うやまをつて君ちうりの
大将宮仕へ行ふと紀奇の君たいめんて
なることとなりしてうのもさんといふうるを

仏の事をとゝ語ハ父乃ゆくことをえせさん
とてをえをつくうし綿の袋より守をとりあて
をを又むらしの事も初んとるかゝるを世の
うやよ心とつをしのゆ事をかゝらぬすと
いろ〳〵のみをもみさつをとりおしてまをせ
つる新のよ後ひのみをもを又奇の君と庭の
めてををとゝふみをとゆをまを病ゆをとりて今
をかをうを後もを右馬つかさうに
○目のまつをこ乃世をとゝむく君ちもよりて
をうを世をゆしを　姫まくを世世をとゝむく

とハ女このこゝろやのれ祭下ハ事とそれより若
君よりとうれしきそとゝふとゝよりとゝ宮
事之為君の事之又おもひ
○いかちあるハそれも元向しへ今れす男子
とあれ雲のあひさに
せう又遣云とまかくのふとゝをを
世ことるふるる都かしるとせまいせんと思
しところに今ハ元あんさんよりゝ事おまと
と云世ふるふ世ひるふのをんとゝふとゝく
うん世りすれるるふハ事とこゝにして

夕きりと我そんを事るふ行事よ夕雪とハ
人こしゝ立てとしれとハ事ゝ立んと
ふうんよ思ひしとこ

一才二 惟りを世巻よろせまふてとハ事
行り二月廿日のふ物句ふ乃ふ家とつせ家を
思ふ所よりる乃居を回忘ろ風まをを
おのひとりのこと事ハ作ハやあるのまを
とこのうををりとをとさて下ゆくあり
ゆれれよ初御まりてよるをて宮御よ中
宿としてふまゝせんと思ひ所ふ恐さる

かとふ宇治中宿りしまひて姫君やうちの方へ
れもしろき花のえだにあるせみのこ童
よりとせてみとをせるを句乃うや
○山さとふかみあるうよ君まうれれしかさ
しとをりてうえ　九五　姫のうや
○かさしれる山の桜よりよ山賤もかうとるれ
まえのそひ人　一　そなりうえそくのまく
来ぬ人ぬしそくの文我ゝなのんのちかの
姫もかことたのこ入よくうしうんして
ぬうとさ海くの行くう

○ふれるて茅の庵ハあれねとも此一ことハられ
しとそ思ふ　かくハうこく遣云して死
ぬしの了宮しうるの元　○いうるんせふ
かれ文ゝ紀世のちうもむたつ茅ハ
草の庵をかれまうしたと物語　一うそ地
ゝかれ浜し姫ゝ　帝句ゝ
○小原ゝ秋乃山さいうるんふ萩ゝ茅乃ゝ
タくれ　九五　しあるのうや　○ゝうこ乃て
ゝうふさうれる山さとを西うよ原そうゝ
声ゝ行く　ゝ春ゝ日の元そくかる中将

はかなくて物さびしきあるさまを然らんかなれ
ふ思ひ給へく○いろのうるはしきちぎれるを
すきとめの油つを神と思ひそやれ
かとおくみてよるうるの宮のみるとて給ひて
姉のみや○元なくて思乃もとうとし
より松の書とるふしとふしるる　姉のみや
○おくゑ乃書てふしとすする書とたるさこみ
人と思ひまして　こなりうるのみや宮
給へて給ひうるそくのみやかれもてを
のさひしきていとそえて海ひうる○立ようん

そとと毎のこし椎うるとむ於しさ床のう
ふるる所　世奇所つふ名付之

一　建三　総角　かの姫みや兄貴宮と御
まるうるのみや元そうたる給へる文の形
おこうする毎の居ふ云合う侍る○居ふ
心とうけうる宮給よとまり給て此ようと
御乃居あ○のみやよ志うもり時我ら方へ汁
つうたいとうとの中乃居ぬうるつやりまうも
よとうりうるる大将あ○のみや○給はまき
ふるう紀ちうとむすひうるとうるとろふ

よりとあひうん　世尊仏ふ鎧角の和と
ゆと世尊いはるの和や　○ぬさもかたしろ紀洞
乃玉のをとあをなわちきうといふむたそん
さるれとそんそんゆせともの和へ海ゆせ
とく姉とよひよもせく我う国よ寝させゆ
とれいぬけ紀了さくう海う紀やよ出入
を問とれいうとこれ心ち姉の和やよおい
しまいと祥退しのい大将もとれいふち
姉ことりけゆよこいるふことと思のうや
てすいしてとれいぬけう姉ととれいはせふ

そといよく姉のれふう紀とるつうしをあひ
紀をこを紀を紀部ゆの和といさるんう姉のと
す第して共アゆ乃う和ふ合ゆ我い姉の和よ
ふ紀とふくしそ紀紀とれくせて奇を
あのの和へ大将　○お姉ふ紀をきてとあう
ふ姉ふいつれうふう紀紀をという和　れ可ふ
といきをいの姉ふ和の和こ　れ可　姉の和
○ふ姉乃そう　心ちとうもとうつうふう和
ふう紀ぬうん　さうく大将れあんとうと
心つうちいあれと和の居いうゆ合

まいらせ給へ　さうかつる銘あけるかとうを
なれとものとも　たちてさいれ詞のいそゆ
声とき清もふ情くふつ者ひろ形
ふ一大将　○山さとの月をれ雲ふ
とうあつるる銘ひけ銘　世一婦の家
○島の者もきこつ山と思ひ小世のうき
こたつ　大将の家
合ういと心をあくうれくいてる
思ひ銘とも京より通るるひく
それこそ思ひ秋紅葉かころふるうく

紅葉ふかこつけて旬のうやとともして
紅とこそていろくうんけんをしのいんとた
をおくく紅葉よてうんそんとす清と
作り音と詠をしてかくとも他の心は世
うや違ふあうんためこ紅ところ
ふ大うやより内心よ者ひは中の君大将ハ姫
乃君より心をうけてわのふとこしめしう
君ととうんたうこいうるよ紅をんをつけく
さふかうる山さとくそうふかうまをる
ふとる人すくなくめしつれる山さとこうる事

卯月のころをひそかに使をもてしらせのふみ志るす
あけまきの君へ人をもて内證にてしらせ申さハ庭の此
うちやきを木のもとにうめしハせん公廉なるをかけまち
まいらせのふみに世間をしのひかねつれなけれ
恋しのらせのひとにこれなくてハいかにしてまし さきと
すくいふ人ありて紀あんのこし道よりともにかう
も句ふそかへりまいハ姫君様ゆるしまいらせ候ハしかと
ふくおもふれなけれハ御心のかりかくはかり
かへらせ給ハすハふかれハあまりの事か西国まて出
まひてそのときハやといひて妹にあはせつるに

大将いろ/\そのゆへをもうけ給ひける用心ハしらす
是れとすゝ鈴ひ道よりかへり給ふをみつからを
入道例しかと沢本ふ心にかへりまいてけんちく
とりてのかゝる大事に及ぶすのふれしと思ひ候へて
大将殿とこそ宇治へまいりのそみハ何かよくり
いまさらしらへのひしのう大将妹様中の君乃
事たのミ入まいらせ候ときて紀よ給へるをとし
せめての大ねをなけきまいらせそのをとも忘れ
申宇治にまいらして帰らもやのひかれ候の
ま宇治より来たとしめてまいらせ候

秋を書くべきふるれば大ぬさをたれかく
はつるべき○かさ是はけとたとへぬれば
よ心をそなへこころとあるべし　又○れるひ
たつるなることかいるきたるみのをとをぬと
ゆる　又○をとれしとやはりとをついよす
むへきこころなせる○たとへ又○悪をひるこれ花
いかしきよ雪の山まやあと残れる　一句
芭蕉　雪ハ　雪ハ　雪ハ　雪ハ　雪ハ
○ましるを思ひいつるをそなへ妹の名
てるかたのむしをく　芭蕉　雪ハ　雪ハ

○行末をたしかしきこのと思ふ日のまつ
多よるふるさとなん

一句　早蕨とはうたてくの和むれしをり
蕨ひろ兄弟一ところのあつかう今ハ妹の和一人
ふなりおいすかつかとしのまうてくのうやと
おまをせ活重阿爾梨のかるとより早蕨とは
そ妹の中居まうをらてとて○居ふとと
あまるの基をつこしハかりとをたれぬる
ちひ名郎　中居　○この基
られよ人せんを紀人のかるふつあれるの

さてさて　此歌は世世とさてさて知られこと

一文字　寄木（ヤドリキ）　これは松ばかりなる大内宮治へ舞ひ

て　御の宮とよりてむしの物うりとも

ゆひて日暮れいとまきそふとまつて浦山

の木よりやとり蓄のいろの殘つもるとをちて

ゆとり涙のつゆ　○陶とり木と思ひそて

この宮とふ藤ものもいてさひかつまし

此奇なこの歌とも陶とり木といふこと

一ふ乃蓄ふ回世院の姫宮おいしまし二の宮が

ゆの源氏二の宮とりる大内祭り陶とり

詠ずの面目と此二乃宮乃ます陶せんさいる

八えさくのゆとくして面白ころかりる大將と

ゆられる御門春とあそそ　附世（ヨ）の菊と

のけるのふして三つのその一ふ者させのかて

三てんふ一番ま者陶とりかりるの大將と附

いまる中納言よて　おいたること時花一えさ

ゆすと作らて　ゆふ乃心を菊の花一えるとハ

世とてすると　心ここの心を女二のみや殘

いとたとこと　大將とりしけるおひ

御前きくのおとたりく　○世乃つゆの

かなるもよさそなる花をくはこて酒のまんと
見まし　体　御うと四五人
あつて拾ひ一園の菊をもとめ
ひやうもをる　さて大将のうたへ姫
御あつてふらつかるよわたし聞してかしの
ゑんと云事あり　一共アヽこやハ宮法ましの
姫の中の宮とよひをせうこれさまを物ゝ
御うとハタ子きりの女子六の宮これを
見つゝあるひやものひろと紀めさ法りさるを
よ共六の宮よりうつ紀く共アヽ夜ゝ紀の鏡

ありこゝろと中ゝ紀宮うこゝこやをうのなかよ
山ちゝ法けてされるやかるゝ名しさ事ハなを
思ひのよ有明もすこゝむしの聲を物ゝ紀
風を見るしむ折かし中文　○山ゝとの松の行
もかくそうり見るもむ秋の風ゝるうり紀
うゝ乃音　さゝ六の宮ゝ共アヽハそふてす
西ゝ折ゝ蛍のなくゝとなて中乃こゝや
○大ゝふゝ西しゝとの
ゝれの折　さゝハ共アヽハ六乃宮よりうつゝ
ゝ西しまゝ紀ゝる大将中の宮乃とこ法へ

行き夜ふかるまで拍子してなくさわぎを
て袖をひきて大将○いさつるよとけつるたの家
ちけこむ　しおかゆる秋のそらの　きこゆ
者アひさきを　ひてうつり者れすると如
○まこ人よるれる袖のうつと多と我う飛よとと
てうちこるる秋　宮五中　月や○ゑるれぬる
中のこゑとたのこと　と考えうふるやかけ
そるれる　又あるとれ共アのこや行てなく
さわまいるせのふ時せんさんよ尾花のおもう
さし出又おすきの極ふいてるいこゑとつる

ぬこむのとそれけふうらなひき風あれぬと後極
○極よるわこのおのふ　ふらきたのすきまの○秋の
家ちけしてなくさらまいるせのつり四五
中元○秋こゑつる極の手紙ちたすすれのく
風つけてこそ元め
すきよるかとりとしてふことありかるる大将の宮法
のむ　しのちこりとたれすれおるる時分者の
なくときて○かるの者のこゑいはしまるやう
とちけこどとけてそふて行　かかるといふか
よ者とて鳥（フクロウ）の事くせてあさる紀国といえあ

よくて好ましい鬼のことをうけ世の人ハ鬼島と
と書こ師匠ふい　小桂嶋蘭菊物語
私云中の君の別腹の妹よあるまやの君ハ好ふ
う紀ふ　てなるひとをこ
一巻六　東屋　これハ筑前の大君の舟たあるハ
めいる中将の君とて西しまたうそくのこや
乃ゆ地方のひなるせ　ひくなる所ハ
多者のひくなる姫君一人出来のうそくのこや
おかしめたかいきこの方ふえるれてまかく
ふを依事面白なるとてをうされと

ゑこちのかことての國の西国よりてわる人を
中将の君とつれてわ國乃湊あらてまこ
中将乃君をも姫君をつれてよ法せうきし
たをのお猶とうく人をこの中ゆむこ　ゑんと
いつをこさをのお猶　さてハ姫君をゑこちのこ
宮ふらこころ　ゆのにふ　ふたにとふてとてをこと
をこハ　ゑこちの宮ふとむこんやさんとらくを
ゑこちのこも我ふ宮ふあハせんとおもをふ
れと中ゆの君をこちて姫の中君を新
さんせめてこれとふなてめ　てとて　ゆけ

おりゐ利これと中のこゝろ行る大将のようなる行ふ
大将○ゑんしゅうのうちゝ見ようて出ずき
世ゐるゝものゐせん　　○堅一郎　○御殿川
せよいさんなるあとを見ふうけとたれた
ゐゐゐ　かく編世せりこれゐこちゝゝ
行ふれよあとをやのゐとゝゝ　山まとか
くゆよあつまやとゝゝかくしてあるのゐよ
そうて居ゐふゐふあるもふく祈こうなれ
ゐゐる時ゐるのゐ湯やゐゐのふ海をのうふ
旬よのゐ出後あつてゐうしくおいるゐと

心をうけてゐこゝろいるゐ　ことをとふしてき
ゐるゐを中やゐうあゐうて腹立て世ゐたへい
それむゐひとゐゐそおゐゐ行ゐてゐよひ家
三家ゐふ家をゐゐらゐおこ中行てゐる府
姫ゐ世てつれゐゐゐ陣家ゐゐふ字治ゐ
ゐて毎のゐゐ人をつゐふしてゐ毎の中ゐゐと
乃行ゐてをゐゐのゐふゐれを字治の中ゐゐと
つけあつゐをゐゐ　又ゐる大将字治むゐて
のようゐを見れ武ゐふ毎のゐよ事と
ゐつゐのゐゐふゐゐゐゐゐゐ毎よゐて行ゐと合て

乃て紀なる少し北姫ゑうつしてをしろ
大ゑや乃面うけにのぞきさてまゐる弁慶と
よひのひくなる紀人のかくさふんとやくそくせ
て乃なる無ゑ ○大帯のむくてあまるよりう
ぬれい思くとえそたるまさりとれたきとと
やくそく乃事と一いせもの油の分なかさう
仍大将い世のゑくとゑ合 中のゑくも
ゑしき世てのるく物よせんとやくそくしのふ
乃なこのさゑ思へかよひのてうある間ゑ扇ゑ家ゑ
小家ゑ行なるよ乃ふりあり面とひくろ

すゑこ乃うへゑ居ゆひくなるこいねるひの嶋た
まひくるくるの波うゑ思とあるまわしとうち
すさくし大将 ○さくしとむうむくるやゑうた
あるまやのあまうわくゑ云く
此奇乃なゑうまやゑ面とくさう郎
一さの中ゑゑ宮法大ゑやかくれなひくゑ大将細く宮法
このふゑ一回ゑふあくるとゑ宮法ゑ豊と作く
せくゑ（演戸人ゑ舞する家のすゑ）ゑとくるとゑ作ひくゑ宮法一さ
えなて也水ゑうし石と法ひくゑ大将
○緑絵ゑ法水ゑるくゑ紀人の面うけとゑる

とめさうなる　　古さうやの事思しを思わし
いてかくのこゝさて豊とたて備ることもお
さなひゝ古さうやの者共豊しともさせるてりさう
大将はあつまやの姫君と東よのせのひゝ宮遊
ひてまゝせ給つ

一夏七　海舟これいまのことく大将あつまやの
姫君とつれゝ行れたのふと思ひ人のあれ
ゝ作りて住方とまつるものゝともおなし
てはきれたてのゝ了ゝうとこ行ようちより行
仲忠のゝふゝをまいゝせのふと思ひ人のあや

ゝのひゝとりてえをいかゝ内房のまりたさ
寄ゝ行　やまりはゝのふはあれと思ら
自めふれ心よまつとゝあゝる　これとて
兵部卿さゝは宮流よまし西院と拝せりさるゝと
ゝまをとりて大将のまゝ　をして宮遊ゝ思て
大将のこゝいろとをしてうちいう流つて
乳母ゝ人ゝゝるとゝる大将と思て姫君も大将
と思ひて了さゝゝひふし給ふ別の人姫君
おとろ記をうさて無アの人の一夜あひ
あくうれゝいのちとうしのふやうと思ひて了

あらあらかつんとして涙ひしうちかすてその
まゝおのゝうちとうるよ尺さゝせ刀とのかなさを
たいうせんとてとき涙ひゝすることこゝ男と無
そひかーするやゝとるよかさてこそや○るゝ紀
世とうあめてもるゝらかしきハきあるゝ取
ハのちなるをを　世ふーあつまや地姫きこ
○思ふなけうさうゝ泊しいのちのこさうめるる世
とおもいましうハ　さうゝ鳴とゝ涙ふうゝく
のれとゝすりのうこ三日めゝ世まあらんまふ
もうるんとそおのふとゝ　世ふとゝに

まゝとゝ一こうるさゝ紀なたつるこゝもたとゝ紀
江の紀　かゝてゝうゝて拾いこゝこゝして
宇治川のかゝとうゝ三日月ゝとうて石ひて
小舟ふゝ毎ひのゝようゝちよふ浦のあるゝと石
船ハきちゝ紀のこゝ泊ゝゝ　とゝて句ふ
こゝや○年ゆしもうゝんゝの橋の小濱さ紀
ちさうゝ流ゝ　内世ー紀こや　○たちゝ紀の
小濱ゝゝハかゝしゝとこの濱あゝ紀ゝ特
世ゝれようこふ○ゝと云こ　さうゝ世ア紀ふより
たをよやゝとゝとうてふふ和ゝて世めゝれふし

言ひ始めるとその紀ちがふとて言ひ
○こゝの言ひさしたの詠めとけて言ひ
ちらすまよいの所　詠て姫宮うさふの事
○始りこれ行よ物語の事ようを中をよそ
これいさこの所に　はうこい死なんと思ひさ先
のふと言ひこそ言ひたのこゝやかくのとく心我
つてこゝかよひのよとい大将岩ふもこゝ風
所に大将こ所ふよりのうこふこゝあそこ
しくこれして思ひ打ちこまりてものこのあに
をこゝをこれる久ずとふ言ふこゝ来ひて

ます面にすいして心そこしく思ひのうれ
かり多用夜の所簾の内さして宮法橋の
うこをなりめ紙に紫布とこゝろく文遣ふ所
ちくこんこゝめとに紀ゆ言ふくさあそこ大将
○宮法をこのなく紀ちこゝろいこちせしとあやふむ
こゝふ心さいこゝ紀　こゝ宮の心いあやこてこのも
いひの所こゝに紀を物やこのこゝこ大将宮法
ふ二三日に所に京こゝて物こゝ紀
おしくれかしのし大将とたひよるこゝをな
こしのこゝまこを所の宮の言ひ紀ゆ

いよ〳〵これの事思ひとつこゝに面をあて
日ゝとりぬるこゝ海毎に無アヽ○なるやうなる
乃宮と人〳〵はまて〳〵見さ〳〵とるこゝのさゝ
みちいさく袖をくゝりてせもとをかた
よりをふこありいつれも面のとゝひなり
○こゝまこゝろをのさとゝ人いうるんそれはなるあり
かさゝてはこゝろかゝるのはうひも面のつゝひと
さし〳〵来るゝまゝ面のつゝひとつゝひ行合く
すゝこさゝゝとよ面ひのふまかをはゝ
無アヽ乃宮やゝこさゝる○かゝるゝ見れはゝ

こゝ乃あまをふ海をゝ見をるゝ見をるさゝや
こゝ乃宮〳〵
を袖さゝいとゝこゝさまゝさゝてさゝゝゝる面かゝ
よひのふをゝゝゝる面ゝ○
○なゝこゝ海はゝをゝ見ひすゝ乃松まつゝゝをとの
こゝひゝるゝゝこれい真列をゝの雲ふの古事
くゝをゝゝとゝんのひゝゝ見ゝ事ゝゝゝれは
思ひのひゝくゝゝ○ゝゝゝゝ見るゝゝゝゝゝゝ
あゝ〳〵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
宿屋とゝた見のひゝゝ四人をゝれゝれす

ちりぬる白ゆきのくれゝ年ふるまゝ白と
なれるとも四八らの花ぞ毎の古道おもひ
かくとやせん白ゆやとゝまるれ毎ゝ六京
ゆふひをそ心乃まゝふるんと思ひ絶て物の
いまゝ云とゝ赤よおこまゝ世ゝ乃れよかゝり
とそ歌はすしてゝ京ゝゆふまゝ世んとゝまゝ
白とゝ行ゝと中あしくゝ物ゝ女ゝ所ゝゝ
しゝて云ゝゝひゝ赤冷ゝ我ゝ死ゝとゝ物ゝ
せんと思ひゝ行ゝ世くゝとあんしゝあゝゝ我ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○すこゝひゝとゝ物ゝけてんぽの世の生面乃川の
水ゝこゝ行ゝれゝと　大和泊よりゝ我ゝか
くゝんと思ひゝ行ゝ　又ゝゝゝ
ぬ世ゝと答ゝあゝゝゝ行ゝ物ゝれゝの世
世すゝもゝすゝのちゝ浮舟　○海ゝゝあゝんゝ
とゝ行ゝゝん世乃世ゝゝゝ面とゝて　又
○かゝとたゝゝゝ世の中ゝふゝゝゝいゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ　これゝ後撰集よ　○ゝゝゝ
とゝるゝゝゝゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝゝゝ　とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゐきんと思ひさしわるひ　白絲髮のごとく赤褐
てきて毒のあくとのいろいて宮流をしてさき
して汐とそ○いつくるも勢といるけるうれ重
乃かてらわ心もなくくくて行　又○ゆけさと
ひ勢といすつとまるさうけふうれ名なうさんさ
とをしてどく　さて宮流川くとそんと思
ひゆ入りうあまりり川流毒くすきすしさう
勢とい云なけつしていうる天物異物も秋と
知て汐けくしと思ひのふ不ようくきおとき
きうて頁ゆりり白ふ毒ゆのうやと思て

本院の流乃山のたく大木のとつれゆりく
すてり心もなくて居ること

一夫八　蜻蛉（カゲロウ）　これハ流うれふ○ゆ毒ふときて
ゆりりも白ゆるるけきのゆまかきりるいれ
あきれてうゆりるふとそりのふられたり
ゆつきやうとれし　ゆりうれふ○の事あのあ
し橋白ひりてきたるくとてきて流ひく

○思ひ神ハ君もてくらんいもるれてその田もふ
心よりて　これハ古今よ　○る紅人のゆとて
かよるハりてまれとらかくろふとなきて

つまるなん　と云ふ中分の心　白ふうさ字○よ
をそれ迄中ノ君のよくに行ものとんくいとろ
うしく思ひ給ふ　紀ろ　きしなくと学て
橋のあるをとしひうふるけて　○さちそみ
のうりあるをいハ部　ゑんしてこそなくうろ
かくのこそをめてうきふ○のゆをきう白
かしく思ひ給ふ紀ろれようけろふのと
ふをつんうろ
れねん　れいまる行ものもふいとう
ゆうれよ学をまうけろふと云こ　なおう

○だとてもうろ紀物ハかけろふのあるなさ能
をうそありられ　世の中将の君ハ宮ハ法ふし
のひうなけさこすまてつなとハのこれをと
をあつそ多色能くれたりとうしたり
これハ大唐よ之例うう唐ハ武天よのれり
あうをのこしあ紀行ひうものともとうあう
めまいうもてうふりとる紀今をまうこ
私云をのありて物と煙とうに紀ふうこのあるこ
とうりとうにうこ

一寸九　多多　これハそこの橋川の俊頼おい
こ八千うあまれる世をまう西千年紀姉とあり古氣

をて初瀬に参るとて向ふ方に法師
ゆきあひしたまひ宮法師のもとにあれいきとゝろは
行て宿とかりうまれ紀伊の国に大事おこりて
摂州の僧都よりつけけれ其ひろかりし
まくら世の人の御の徐要のことてよ赤袴をきる
う国うちあひくあるもとにして若うえて
なるねそのよ鶯るくる反化のものう孤うなる異
くくて僧都はよりは僧都行うえ行ふ
いふくいうさ母をくて人あるとる国入る妹
乃尼をつせふく美ふ尼しうよあひうとう

僧都のかうさせいはとるらかしう人のうしき
ふなうさてるふあるくそむこ　山の之陽稼の国
ゆし児とう化あうとう人のあるとすれいそこい
とうまうこゝとて三きりくせしそのやうるう人う
まこい死うる人とすてるう嶺生しうるう
こて僧都かちして心をつけてはるくそ海
あくいさまれうさひをくう字法別成をるんと
おのひくくしうこうとはいるふとはるやらん
こうさうとてなるあるる人とまる細をまうは物い
ハすをなる石一変るけ一発るふしうかるとと

うつらんまさにかひらあつさあまつうすくしるらやと
思ひつく ○彼とろけしまうこの川のえやこせ
さもうしうけて詠かとこめし 是ハ秋の天秋
あらされかハひしと紀 ○なつられせく秋たとふ
なりぬとも忘てうこともてとこめよ
詠るひしが哥の心 此哥ハ七条の后の小路西の洞
院停子院よ此紀と紀詠まて これハ一こうの寛
平法王御たゝ西さまへ 女君を后とす
よし風をこかたとろうと項たうりとも紀る哉
とたもちされともまう 女房のかくちうて妹の后乃

同心して来りて小野小町まきいらせて 簑のえ
たらんけにておのよに居る 月のおもしろき夜 女君
おころよハ秋の夕へとてゆみともなう むら神よ
露そこありし 古詩よ △大唐四時心惣苦就
中腸断 是秋天 古今の哥よ ○山さとハ秋こそ
ことよさびしかれ 鹿のなくねよ目をさましつゝ
此詩の心や かくしてすてまくハ秋ふかくなりて
是よ入風吹さわり 鹿の声を聞よそのさかしき河
ふかき田よ稲荷ありて哥とうらかひとさまて
しとい詠く 古と思いあつく 女君 ○されかくて

うたせ乃中さうるとも波うちたつ乃の
ちるとゝ乃れ打まとゝ
て点しと思てうかつるとしの
とさて　○袖ふれし
ゝふ乃ふ乃の乃ゝ乃
のいゝとゝ　○山さと
打ゝ乃ひさ紀のたの
○宮ゝ乃花世ゝの乃
つゝ乃ゝ乃ゝ乃
心しゝ乃紀をゝ

又ゝ乃ゝ乃ゝ乃れ
の佛ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ
人のゝけもとま
ゝゝせきあ
さゝゝ行ゝゝ
くゝゝゝ
一深ゝ乃ゝ
僧都よゝさゝ
ゝゝ乃ゝ乃ゝ

僧都誠のあらいさんるふともかくもとて髪を
剃也法師了小僧よりはるかにうるさきなを身
はしたゆふさとのさひしきまてるひとりしく
すまとまいるあたらのこそむかしのなかり
御はして思ひあまりかくはさしいり
うしもうたつけのこせられしはるひしの
いふこはせをまもるひとを名をは髪をそりて
うきかの○るたはやとも人とも思ひて
すてつるせといさるよりてはら　又○かさりとと
思ひるれかーせの中をかつりしてむさぬる

髪を剃て遍照僧正髪そり法師時の歌と思ひ
出しのまつ○をそうちかれとてしと為相
むかしの我ならをとるうくすやもとも　僧都うを剃
法ふとうく　流浪三界恩愛不能断(ヨニ アイフフタン) 奇恩(キンヲウ) 無為
真実報恩者の文をとをくのまつ

一夢十　夢乃浮橋　これなる大和国やうく
をへうの国をたをしをへ系をてを時宰相君
小僧都相ぐうしをさいしやの君うの
かるを法ふうかるこれをて云法乃ふと思ひ
てかをしむををこしわして大和をあつぬる

相とすいまゝかされること大なるやうに心のゆるく
俗説よあいんとおもひしめしてのゆるまん東堂
根本中堂へ系統ひろく次の日横川へ越給ひく
俗説よりんさんしのひろく拝給ひたつもたまへて
をつたゑ世しいとゝとのゑつせもてようこのゑ
乃こと神こゝろよかてりのゝうとのことく大将を
俗説よみとうけゝこゝるとしー大将よ常陸の
うこゝろをとめしつゝとゝてありうこゝろゝとゝを
一のおゝをゝうこゝふゝ思ひまま
かれとめしつゝひまてこれとつゝいふしゝ

俗説の名を我ゝ名よゝ沼ひて小野よつゝいしの
下山つゝひ小野つ乃ゝ上洛のおもむき我
ゝけてみをゝをするこてるゝいのえんこゝるひく
ゑをあゝしゝと思ひ給ふ文ゝゝゝゝ
○法の師とたつゝ乃たをゝゝゝゝ
まゝゝ給ひ　以ゝよりゝ　七百七十四首ゝゝ
乃元来こ　浦一巻のゝ可い桐壺の文衣地延喜
ゝるこゝよゝるゝいゝ母ゝゝしきいいのちゝりゝ
ものゝゝうこゝ　如ゝこゝれとゝゝゝ
けれゝゝこゝふて名ゝ

思ひさまたげひろく学うてうもとゝなれば
さゝふ思ひもよらぬ我のことゝふるあるべきゝ
かゝる遠ふかくとそかゝしてこれを学の海場
と云こ一　孔子云ふかくのことくの事を書き
ものとゝ学の海をしと名付るよし　初
きりつかの学とるつゝ桐つかの文章の事
と書れこれより学ぶ中ふ出ぬ者をつゝる
半歳ハ言ふより歳ハ人の為ふ学ぶ中ふも
此学と学のう記をしと名付事ハその儀い
まゝこゝすいこ
言云云僧侶のみと大将

乃ゆとゝ学ぶ心ハ山路へつゝかしのみよの為人に
して正一のふ孔子学のう記をしと名付ること心ち
うつ乃をしをこゝふこ人学のう記をしをハ学み
孔子とるのふこ人さることと踏人ようせて学
のう記をしとこれハ孔子一級の事ハ孔子
学ぶと云心孔子いとくふむをそうふ学ぶこ
学ぶくいとくをこ人なれのをしめ孔子ハ
学乃御と記ふ孔子りんとおくこれハ桐つかの
御門より王の代の事をいうふ学ぶさされた
跡せいハ百十年ようしも学ぶ又萩（サウ）同ふ蝶

よりて花は散しも若し正論なる代のことは若
なるべきはかりは人王のそしめの神代の世方
へうる若き人王ことうまあるは天神七代地神
六代とうる若きむかし神代地のあり今世は
人王のそしめはよのいまてはそとも若う
すこしもこいうんやく人間目前電光朝露のさ
とやさしい年齢は大政の入道のまとふ
ふ七十九代高倉の院の時一門連署捧げ
連て祈昌他は異しもうる若きとふまとの
らいうんとて祇園精舎のかねの声法行無常の

御音をあ豊なるものは必衰おうるものは必滅と
いてうまうんて一朝の栄花も及うれも
うる若きこれうのかうさうて一切衣生仏道修
行ここせうと散心うて源氏の書軸と若
宿橋と云えうされは俗名書のあるれとも若
とは性の花と開御法乃影と俗とうるかく
のふうと作者は今のうきそしは稚古乃若
法性のそしとかくうとうるとうれは相云修法
乃ことうれとも実仏道の脇級こうう
○えうきうあはりてすこうめうことはうる若もうつも

かゝるさかり筆此巻のうきとしに経くのこあり
といふとも いはゞ仏道の一大事はなれ 神
道の深秘とも耳とぞいはひそれにこれと
略し也仮乃詞云此書へらん乃する事あらは
伊勢伊吾乃秘和をまこ石山寺の観世音池
御守護ありかしめらく仰せられしの阿世あん
松ん坪生菩然せ類志ん也

○そとつかさ小かみすゑの袖のれいは花もゑき名とさん

一 こゝ人日こゝろもとは かゝらいんの事を

一 らうさせ いとしきことあり

一 なよひやふとは たそやかなる事

一 物の紛とは にしひかの事

一 ときめかしきとは 時めくといふ事

一 かくらめとは 御子たちの事

一 あふひのうへ こゝやすに

一 こゝろもとなしの事 いとは

一 ゑんたちめころ 髪をかけて又仰ありとは何を仰か

朱雀院 一の御子にて ます御事

冷泉院 これもこまりつかの御子にて 内乃御子之朱雀院の御弟

今上 これは朱雀院の王子こまりつかの御孫さる合 御せいの御とき

弘徽殿の女御 柿つかれ かしは木をもいふとこ

今はとてやとられぬとも思ふれきつる袖の花よりとはすると
このうしろ姿は思ふとも世とともに名残なと
これをかぎりとふるさとにいとまをもとめて
そらにけんりのそつ詠をこそ今ゝかゝるふみをとゝいふもこれこ
ゝとゝ記みうそ八月かゝるふのさきふてもいれそう
宮流のふとをもうそくとも因事こ
あるをやうれまひくゝ侍あり之ゝかゝ侍ゝ
とゝ事こ

如此上下乃世ハさるゝ
よるゝ世侍見まくゝ
世書女の毛るれ父
うゝひ名く侍ま
世かゝ毛侍見乃う
つゝ侍をのかや

明和五戊子暦菊月七日畢

右此二冊ハ大岡氏ヨリ借リ寫

扇面之助ニモト
模寫至也

安永九庚子年 二月廿七日

源昌益